

中村 豪著

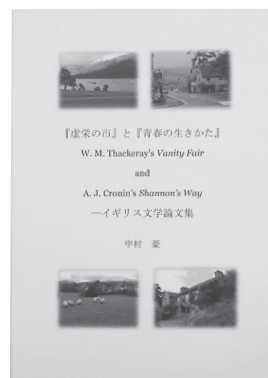
## 『虚栄の市』と『青春の生きかた』

—イギリス文学論文集—

金子 弥生

中村豪先生は、長年にわたりイギリス文学を研究なされ、特にシェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) から十九世紀イギリス小説を代表するサッカー (William Makepeace Thackeray, 1811-63) を中心に研究を続けていらっしやる。そのせいか、先生のお話はいつもことば遊びやダジャレに溢れた文学の薫り高いものであり、先生と話をするときには、こちらも常に五感を研ぎ澄まし、気の利いたことばを返す必要があるのだが、その分、緊張感に満ちた楽しいひと時を過ごすことができる。

さて本書は、サッカーの代表作『虚栄の市』 (*Vanity Fair: A Novel without a Hero*, 1848) と二十世紀にイギリスで活躍したクロローニン (Archibald Joseph Cronin, 1896-1981) の『青春の生きかた』 (*Shannon's Way*, 1948) を取り上げ、研究した書である。両者は人気の作者であったが、現在その人気が減えている点に於いて共通しているという。



2018年2月20日発行  
三秀舎  
A5判 160頁  
非売品

二部構成からなるご著書は、第1部は「サッカーの生涯」、「虚栄の市」について、「クロローニンの生涯」の三章立てで、両作家および『虚栄の市』の簡単な説明が記されており、第2部の作品論へのイントロダクションとなっている。昨年

末、映画『Merry Christmas! 〜ロンドンに奇跡を起こした男〜』が公開された。これはサッカーと同時代の作家、ディッケンズ (Charles Dickens, 1812-70) が『クリスマス・キャロル』 (*A Christmas Carol*, 1843) をどのように執筆し、完成させたかを描いたものである。サッカーはこの映画に人気作家として登場して、創作に行き詰ったディッケンズに皮肉を言う。だが、『クリスマス・キャロル』が世に出ると、その価値を認め、大いに評価したのもサッカーであった。二人は時代を引っ張る作家として互いを意識しつつ、切磋琢磨して作品を生み出していったのである。よきライバルとしてのお互いの存在は、二人の執筆活動に大いに影

響した。その証拠にディッケンズは、サッカーの死に際して追悼文を寄稿している。

サッカーもクロローニンも活躍時には人気を博していたのだが、現在の人気は高くない。一方、ディッケンズは現在でも人気作家として読者も多い。また、クロローニンと同時代作家のモーム (William Somerset Maugham, 1874-1965) は人気を保っている。これに納得できない中村先生は、両作家の作品を研究なされ、作品のすばらしさを証明なさるうとしたのであろう。

第2部は『学苑』に発表された論文に多少の手直しをして収録された三つの論文、『虚栄の市』の主要人物の特徴、『虚栄の市』におけるシンボリズム、『Shannon's Way』における恋と結婚の障害』から成る。

まず、第1章『虚栄の市』の主要人物の特徴』では、登場人物の名前について考察されている。『虚栄の市』の作中人物名を意味深い名前と平凡な名前とに分類し、人名の使い方を解説し、「意味深い名前の人物と彼らの言動、言い換えれば性格との関係を明らかに」し、「主要人物がどのような名詞で言い換えられているのかを検討し、各人物の特徴を解明」しようとするものである。本作品には六十人以上が登場する。特にレベッカ・

シャープ (Rebecca Sharp)、『アミーリア・セドリ (Amelia Sedley)』と二人の女性と彼女らをめぐるドボン大尉 (William Dobbin)、『ジョウゼフ・セドリ (Joseph Sedley)』、『ロードン・クローリー (Rawdon Crawley)』、『ジョージ・オズボーン (George Osborne)』を中心に物語は展開する。この著書には二ページにわたり、オズボーン家、セドリ家、ドビン家の家系図を掲載している (30-31頁)。人物関係が明らかになったところで、「主要人物」、「意味深い名前の主要人物」、「平凡な名前の主要人物」、「意味深い名を持つマイナーな人物」の一覧表が示される (32-37頁)。そこから、サッカー作品に登場する人名の特徴は、「名前の意味によって印象的な性格」となっていること、主要人物の名前を「さまざまな言い換え」をすることでその「特徴を多角的に把握できるように描写」していること、「聖書や神話・伝説、文学作品等の人物等、多彩な名前」を利用することで作品に面白みを加えていることを明らかにしている。

第2章『虚栄の市』におけるシンボリズム』では、十一項目を挙げて考察する。論文では、フィッグズ (Figs)、アミーリアの手紙とジョージの手紙、イフィゲネイアの置時計 (Phigenia clock)、ジョスの肖像画、アミーリアのピアノ、ジョージの肖像画、ベッキーの馬、ジョージの付

け文、ナポレオン・ボナパルト (ナポレオン1世)、クリュタイムネストラ (Clytemnestra)、『ミス・クローリーの富の順に分析が行われる。例えば、「ナポレオン・ボナパルト」の項目では、『虚栄の市』六十四章に掲載されたナポレオン帽を身に着けたベッキーのヴィニエットは、「無限で容赦のない避けがたい征服」という彼女の「ナポレオンの性格」を象徴していると指摘する。ベッキーは母がフランス人踊り子であることから、フランス鼻頂である。このヴィニエットで小型望遠鏡を手にして「フランスの海岸からイングランドを望む」彼女は、彼女と関係するイギリス人、つまり「夫のロードン、スタイン侯爵、アミーリア、ジョス、ミス・ブリッグズ等を食い物にする」。また、「ナポレオン」はアミーリアの父、ジョン・セドリを破産に追い込む象徴として使用され、「ナポレオンは不運の象徴」であると指摘している。

この十一項目以外に作品中に多く使用されているシンボルについては、一覧表にまとめられ、一つ一つに対する簡潔な解説が付されている (95-96頁)。

『虚栄の市』には、多彩なシンボルが使用され、作品に深みを添えていること、挿絵が効果的に使用されていること、「同一人物について複数のシンボルが適用される場合があること」が指摘され

た。同時代作家ディケンズと較べて、今日のサッカリーの評価は不当に低く、すべての作中人物が「生き生きと行動している」のは、シェイクスピアのそれに匹敵すると結論付けている。

第3章「Shannon's Way」における恋と結婚の障害」は、こちらも現在、不当に低い評価を受けているクローニンの作品研究である。カトリック教徒である主人公ロバート・シャノン (Robert Shannon) とプロテスタントのジーン・ロー (Jean [?] ) の恋が最終的に結婚に辿り着くまでの葛藤を考察する。ふたりに立ちはだかる最大の障害は、宗教の違いである。『なんでもわかるキリスト教大事典』(八木谷涼子著) から引用して、「たとえ同じ神を信仰していても、ローマ・カトリック教徒とプロテスタント教徒では「宗教が違う」と認識され、家族からも教会からも結婚を反対された時代が長かった」と説明し、この難局をふたりは再生により生まれ変わり、「宗教の違いよりも愛情の方が重要である」という結果を選択したのである。日本で不動の人気を得るモームに匹敵すると言えるであろう「独自の面白さ」を持つ彼の作品にはさらに研究すべき点があると著者は述べている。今後の研究が待たれるところである。

(かねこ やよい 英語コミュニケーション学科)